

SIG-CH の 100 回記念研究会に際して想うこと

八村広三郎^{†1}

情報処理学会「人文科学とコンピュータ」研究会発足後 100 回目となる記念研究会の開催を祝し、本研究会 3 代目の主査をつとめたものとして、思い出とこれからの本研究会に期待するものを述べる。

An Essay upon the Commemorative 100th Meeting of SIG-CH

KOZABURO HACHIMURA^{†1}

This is an essay of looking back and forward to activities of the Special Interest Group “Computers and the Humanities” in celebration of its 100th meeting.

1. はじめに

まずは、研究会開催 100 回の達成、おめでとうございます。今までの、主査・幹事の方々のご努力に敬意を払います。研究会が設置された今から 25 年前と現在の状況と比べると、自分が年を取ったこととともに、世の中の状況に隔世の感があると同時に、うーん、進歩の度合いは遅々としているなあ、と思うところもあります。

さて、今回、担当者の方から原稿執筆の依頼を受け、何を書こうか、このような寄稿を集めることの意味があるのかなとの疑問もわき、なかなか考えがまとまらないでいました。もうすぐ現役をリタイヤする私にとっては、今後の目標というより、自分の経歴やこの研究会立ち上げの時の様子、そのあとの関わりあい程度しか内容が思いつかないなと思っていました。締切は刻々と迫ってくるし(もう過ぎてる!)、冷や汗ものでしたが、以前書いたもので何か参考になるものがないだろうか、自分の PC を探し回ったところ、一つの気になるファイルを見つけました。6 年ほど前に書かれたもので「私と研究会」と題されたものでした。読んでみると、これは、研究会の日本全国での開催の目標が達成された際に書いたものであることがわかりました。なかなかよく書けているじゃないと、自画自賛し、これをそのまま利用したらいいのではないかという、悪魔の誘いが聞こえてきます。しかし、これはいったい何に寄稿したものか分からず、もし、これがすでに研究会報告に出たものであれば、原稿の権利は学会にあり、いろいろ厄介な問題も生じるおそれ大です。

数日後、ようやくわかりました。2007 年に及川先生の呼びかけにより、総研大で開催された全国制覇記念のシンポジウムで配布された、「これから始まるじんもんこん」[1]に載ったものであったことがわかりました。

前置きが大変に長くなりました。及川先生には申し訳ありませんが、この文章の権利は、冊子の編者である及川先生には譲渡していませんので、著者の権利として、ここに再掲させていただきます。

さて、以下の 2 章の内容は、このシンポジウム記念誌[1]

に掲載されたものと、文献の参照関係を変更したこと、句読点を変更したこと、わずかな誤りを訂正した以外、全く同じ内容です。

2. 全国制覇時点での回顧

1995 年度から 96 年度の 2 年間、研究会主査を務めた八村です。全国制覇の偉業！達成おめでとうございます。私と本研究会との関係は研究会設立申請時の発起人リストに名前を連ねたことに始まります。その後、89 年に学会本部から設置が認可されて、今年で 17 年¹⁾になります。終始本研究会にはお世話になっています。一方、私が、博士課程を終えて研究者としての活動を始めてから今年で 31 年¹⁾になりますので、実に私の研究生活の半分以上をこの研究会とかかわりを持っていることになります。

私は電気工学の大学院を出てから、大阪の国立民族学博物館の研究部に就職したというやや風変わりな経歴を持っています。杉田繁治先生のもとで、コンピュータ民族学分野の助手として 4 年間勤めました。それまで触ったことも見たこともない、最新で大規模なコンピュータシステムや画像処理システムの研究利用と管理が主な仕事で、画像処理システムや CG のシステムを稼働させるためにずいぶん苦勞しました。この民博での生活は、私にとってはまさに異文化体験でした。民博の先生方にはさまざまなことを教わった気がします。しかし、所詮私には遠い世界のことで、民族学には完全に染まることなく、再び工学寄りの世界に戻ることができましたが、実はこの 4 年間の経験はどうやら私の原体験であったようで、その後相変わらず何らかの形で文科系にかかわりを持っていることになっています。

本研究会設立の趣意書は確か、洪さんと及川先生が中心となって取りまとめられたと思います。当時、京大の教育用の計算機センターに所属し、あまり研究と縁のない生活をしていた

^{†1} 立命館大学情報理工学部
College of Information Science and Engineering
Ritsumeikan University

1) 2 章における年数の表記は、2007 年を基準としたものである。

私にとってはきちんとお手伝いできるかどうか心配でもありましたが、発起人の一人になるようにと声をかけていただいたことがうれしく思われたことを記憶しています。

その直後、京大の中で工学部に異動し、少し研究環境がよくなりましたので、いくつかの関連の研究テーマをはじめることができました。民博にいたるときに初めて知った舞踊譜 Labanotation の研究などもそのひとつでした。現在、「無形文化財のデジタル・アーカイブ」などという大それた研究テーマを持っていますが、そのルーツは民博にあり、育てていただいたのは本研究会ということができます。その後、及川先生の特定領域研究を経て、相変わらず文理融合の研究活動を続けることができていますのは、この研究会のおかげです。また、その余録で日本国中を制覇することもできました。

主査が初代の杉田先生から2代目の及川先生に代わった1993年から2年間は幹事を務めました。このときだったでしょうか、及川先生から全国47都道府県を制覇するという計画が発案されました。その当時は、これは直接研究とは関連のない目標で、正直なところばかげた話だと思っていました。しかし今にして思えば、その土地土地での発表の様子がその土地の印象と一体化されて記憶に残っていることもあり、画一的になりがちな研究会活動を特徴付ける有意義なアイデアだったと及川先生のアイデアに感服します。また、研究会の前夜に懇親会（「前夜祭」）を開催するというアイデアも及川先生によるものです。これも、最初は面倒だなと思っていましたが、確かに、各地方地方で研究会を行うには大抵前泊が必要で、全国から集まるものがゆっくりと懇親を深めることができる、これもグッドアイデアです。ただ、当日二日酔い状態になりがちなのはいささか問題ではありましたが。

さて47都道府県制覇ですが、私自身は、佐賀、埼玉、宮崎、群馬、山形、山梨、富山、栃木、青森には参加できなかったように記憶します。このうち、佐賀、宮崎、群馬、山形以外は本研究会以外の出張等で訪れた経験がありますので、おかげで私もほぼ日本国中を経験することができました。残りの4県を訪れることは老後の楽しみとして取っておくこともできます。

94年から現在の立命館大学へ移りましたが、ここでも、ちょうどスタートした及川先生の特定領域研究のおかげで、関連の研究を続けることができました。立命館では98年に文理融合の研究センター「アート・リサーチセンター」が設立されましたが、それまでの経験に基づきこのセンターの研究活動にも参画することができました。これは現在の21世紀COEプログラムの拠点として選定されたことにつながっており、まさに、私の研究活動の大部分は本研究会が母体になっています。

以上のように、何度も言いますが、私の研究生生活の半分以上は人文科学とコンピュータ研究会を中心として行われました。本研究会を支えてこられた皆様に、また、各地で会場や前夜祭のお世話をいただいた先生方に感謝いたします。前夜祭で私のお酒とラーメンに付き合っていたいただいた方々にも感謝します。最近はずがにラーメンはきつくなってきましたが。

73回もの研究会を継続できたこと、しかも300名という登録会員数をキープしながら継続できたことは大きな力です。全国制覇の目標がその原動力だったかもしれません。しかし、今後、このまま継続させるかあるいは新たな発展を狙うかは、全国制覇を達成したこの時期、われわれで知恵を絞って考えるときだと思います。ひとまず日本制覇は達成できたので、環太平洋諸国を制覇（侵略ではありません）するのもひとつの目標として考えられますね、というのは先日及川先生と話したばかりです。

なお、少し古くなりますが、少しだけまじめな、通過点での回顧は、以下の3つの報告[2][3][4]にありますので、お暇な方はご参照ください。文献[2]が主査としての2年間の総括報告です。そういえば、以前は主査の任を終えると、このような2年間の回顧報告をすることになっていましたが、最近は見かけなくなったようです。どうなったのでしょうか？

3. 全国制覇以後のことなど

さて、前章に引き続き、研究会の全国制覇以後、今日までの流れを振り返ってみます。まず私自身の個人的全国制覇ですが、山形へはごく最近大学の仕事で訪れましたが、佐賀、宮崎、群馬の3県は訪れた記憶がなく、ここだけ未踏地になっています。

本題に戻ります。2章に述べているように、2007年に立命館大学で、まさに人文科学と情報科学の連携をうたって提案した21世紀COEプログラムの採択を得ました。これはこのCOEの拠点としてのアート・リサーチセンターの存在と相まって、本学のこの分野の存在感を上げる大きなきっかけになったと考えています。本学の21世紀COEは文学研究科、政策科学研究科と、当時の理工学研究科の連携による、文理融合型の研究プログラムでした。

「京都アートエンタテインメント創成研究」という、何だかわけのわからないタイトルで打ち出しましたが、歴史都市京都であり、また長く日本の文化・芸術の拠点であった京都、また、明治初期においては、水力発電、電車など、さまざまな当時の最新技術を導入してきた京都、さまざまな歴史的な、歌舞伎、日本舞踊などのエンタテインメントの拠点、また近年のコンピュータゲームの発祥の地としての京都、これらの多くのキーワードを組み合わせでできたものでした。すなわち日本の伝統的な文化芸術のさまざまな切り口において、さらに情報科学技術によってリノベートしていこうという欲張った目標の現れでした。基本的には、いわゆるデジタル・アーカイブを参加研究科のバックグラウンドを活用してさらに推進していくという考え方のものでした。

現在のアート・リサーチセンターで公開している数々のデジタル・アーカイブの成果は、まさにこのCOEによるものです。また、多くの海外研究拠点との連携もこのCOEで実質化して行きました。

このプロジェクトが終わっての最終的な評価では、必ずしも満点の評価とは言えませんでした。そこそこの好評価を得ることができ、次のグローバル COE (GCOE) につなげることができました。

GCOE の申請時には、デジタル・アーカイブのキーワードでは、継続事業と見なされる可能性があるため、新しいキーワードを探す必要に迫られました。いろいろ思案したあげく、見つけ出してきたキーワードが、欧米でポツポツ使われ始めていた "Digital Humanities" でした。

当初、この用語の概念はよく理解できませんでしたが、しばらくして、デジタル・データに基づく人文科学研究・教育の活動とその支援のことを指しているのだと気が付きました。コンピュータはもちろん主要なファクターですが、現在ではコンピュータは、まさに身の回りにある当たり前のもので、また、インターネットは、家庭の電気や上下水道のような基本的インフラであり、ことさらこれらの身の回り品やインフラの利用を主張しても意味がない。むしろ、これらのインフラによって膨大なデジタル化された情報が流通し、また、個人個人が自由に発信できること、これらのことを基本にした新しい人文科学への(意識)改革と捉えることを狙ってのキーワードだと理解できました。科学全般に広がりつつあった、e-science の流れと同じと考えることもできます。

GCOE の申請当時、日本ではこの「デジタル・ヒューマニティーズ」というカタカナ言葉は、出版物はもちろん、ネット上にも全く見当りませんでした。ということで、GCOE の申請にあたっては、無謀にもこの言葉を使って、「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ研究拠点」と名付けることになりました。ここでは、当然、それまでの COE におけるデジタル・アーカイブの研究成果と蓄積されたデータを基本とすることになります。

それまでの 21 世紀 COE では、主として研究拠点の形成を、という文部科学省の政策提言でしたが、GCOE の方は、主に博士課程後期課程における研究者養成・教育の変革を狙ったものでした。したがって、このデジタル・ヒューマニティーズ形の教育カリキュラムを組み込む必要があります。また、プログラム終了時には、その成果を実際の研究科、専攻など、形のあるものとして残すことが求められています。

申請等の詳細は省きますが、この GCOE も 2011 年度で終了し、最終評価を受けましたが、「目標は十分に達成されている」というコメント付きの望外の好評価 (A 評価) を受けることができました。その結果は、大学にも大きな力を与えることになり、2014 年度から、本学の文学研究科の中に「人文情報学専修」を設置し、学生の募集を始めることになりました。

以上、SIG-CH の活動と離れて、私の所属する大学での歩みを振り返ってしまい、本来の寄稿の趣旨とずれたもの

になってしまったかもしれません。しかし、本学でのこれらの活動と実績は、私自身の SIG-CH での活動の実績(これは特に特記すべきレベルのことは何もないと思いますが)によるものであることが大きかったと考えています。これらの大型プログラムの申請時には SIG-CH のことは何度も説明してきた記憶があります。

さて、2つの COE 期間中、SIG-CH との連携も、さまざま考えては来ましたが、最終段階ではだんだん私自身も息切れがしてきて、SIG-CH の積極的な活動が十分にはできなかったという感慨をあらためて抱いています。この点は研究会の方々には申し訳なく思っています。

CH あるいは今の DH における日本研究活動の一つの特徴は、いわゆるマルチメディア情報処理の利用という点にあると思っています。私自身がこの分野を専門としているということによるバイアスかもしれませんが、海外の DH 研究者からは、画像解析、CG、人工現実感 (VR) などを応用した研究は、かなり興味を持ってもらえます。「デジタル・アーカイブ」も日本から発信した用語であり研究分野ですが、この概念は、日本のおよび海外の情報分野の研究者からは広く受け入れられています。

また、2011 年から、京都大学の石田亨先生、土佐尚子先生と共同で Culture and Computing (文化とコンピューティング) という国際会議を立ち上げました。京都での隔年開催を継続して実施することを意図しています。2011 年度には京大で、本年 2013 年は立命館大学で開催します。今後、京都の各大学で、引き継いで行っていただければ、幸いです。

全国制覇以後、私が書いた人文科学とコンピュータ関連の文献についてあげておきます。文献[5][6][7]は画像電子学会誌の年報的な特集号に、文化財に対する画像情報処理関連の研究動向を寄稿したものです。また、文献[8]は、研究会からご推薦をいただき、情報処理学会の 50 年の歴史を振り返る冊子に、この間のデジタル・アーカイブの流れを書いたものです。

本学グローバル COE では、プログラム期間の終了時点までに各年度 1 冊ずつ、合計 5 冊からなる叢書を刊行することを企画していました。毎年順調にはなかなかいかず、最終年度に駆け込みで執筆・刊行となりましたが、結果的に 6 冊を刊行することができました。ナカニシヤ出版から、シリーズ「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ」として出版されておりますので、ぜひご参照ください。私が執筆、また、執筆および共編したものは、それぞれ、文献[9]と文献[10]です。

このシリーズ本の特長は、全編バイリンガル構成となっていることです。グローバル COE の趣旨である海外展開をねらったことですが、前半部分が日本語で、後半部分が英語で同じ内容を記述したものとなっています。余談ですが、出版社からは、営業的にはコストアップになり、日本、海外どちらの購買層にとっても、あまりよろしくないとの

コメントももらっています。確かにそうだったかもしれませんが。

4. これからのこと

さて SIG-CH のこれからのことですが、もうすぐ退いていく人間として、あまり口幅ったいことを申し上げる気持ちはありませんが、やはりこれからの展開は、グローバル化ということではないでしょうか。

前述したデジタル・ヒューマニティーズ、当初は何かよくわからない概念ではありました。しかし、現在の充実したネット環境、さらに、ビッグデータという言葉に代表されるネット上の多くの情報、学術系の素材情報の割合は今のところはそう多くはないかもしれませんが、今後は多くの研究情報がネット上に存在する状況が確実に訪れます。ネットには国境はありません(一部あるかもしれませんが)。ネットを通じての情報の公開と共有、また研究交流など、人文科学の研究もデジタルデータを媒介としたグローバルなものになってくると思われます。

SIG-CH はドメスティックな日本の情報処理学会の傘下の研究会ですから、国内の研究者に対する研究交流、研究支援の組織、場であるのは当然ですが、ここを窓口にして、さらに海外の研究者との交流を目指していくという流れを形成することを、今後のポリシーにしてはどうでしょうか。このことは、2章で述べた2007年時点での回顧録の最後にも記しているところです。特に、この分野ではまだ途上にあると考えられる、アジア圏の研究者との連携が重要ではないかと考えています。

5. おわりに

100回達成の記念すべき研究報告にはふさわしくない、大変な手抜き雑文になってしまいました。企画・編集に関わられた方々、および他の著者の先生方には、大変ご迷惑をおかけしますことを、心からお詫びいたします。

謝辞 ご指導いただいた先輩の主査の先生、私が主査在任中に幹事としてお世話になった先生方に、謹んでお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 及川昭文(編): 今日から始まるじんもんこん, 情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」全国制覇記念誌, 2007.1.26
- 2) 八村広三郎: 人文科学とマルチメディアデータベース, 情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」研究報告, Vol.97, No.48, pp.1-6, 1997.
- 3) 八村広三郎: 人文科学とコンピュータの課題, 情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」研究報告, Vol.2001, No.51, pp.49-50, 2001.
- 4) Kozaburo Hachimura: Thirteen Years Experience of Collaboration of Computer Science and the Humanities in Japan, 情報処理学会「人文科学とコンピュータ」シンポジウム論文集,

pp.19-21, 2002.

- 5) 八村広三郎: 文化財と画像処理, 画像電子学会誌, Vol.35, No.6, pp.718-720, 2006.
- 6) 関口博之, 八村広三郎: 文化財と画像処理, 画像電子学会誌, Vol.37, No.6, pp.832-834, 2008.
- 7) 八村広三郎, 文化財と画像処理, 画像電子学会誌, Vol.39, No.6, pp.853-854, 2010.
- 8) 八村広三郎: デジタルアーカイブ, 情報処理学会 50年のあゆみ, pp.325-327, 2010.
- 9) 川嶋将生, 赤間亮, 矢野桂司, 八村広三郎, 稲葉光行: 日本文化デジタル・ヒューマニティーズの現在, p.206, ナカニシヤ出版, 2009.
- 10) 八村広三郎, 田中弘美編: デジタル・アーカイブの新展開, ナカニシヤ出版, p.342, 2012.